

ジ「おい、何聞いてんの？」

女「(笑)」

ジ「誰？ジャニーズ？ジャニーズ顔じゃない？」

女「(笑) いやいや」

ジ「何してんの？おれ、今図書館行ってきた帰り」

女「ああーそうなん？」

ジ「なんか歩き方キレイな子だなと思って」

女「(笑)」

ジ「何してんの？どこ行くの？」

女「帰ろっかなって思って・・・」

ジ「帰るの？早いじゃん(笑)。門限ある？」

女「いや・・・」

ジ「キレイな二重やな。言われたい？パッチリ二重。整形？」

女「いや・・・」

ジ「(笑) あ、いじってないか」

女「はい、なんも(笑)」

ジ「まあいじらなくていいね。小動物的な・・・モテそうやもんな」

女「いやいや(笑)」

ジ「ちゃうの？何、札駅から？」

女「いや、違う。宮の沢」

ジ「宮の沢って何線だっけ？おれそんなこっち来て長くないから分からん(笑)」

女「東西線」

ジ「あ、東西線か。このへんだとこっちから行けるんだ。そっちからかと思った。何だ、帰るだけなの？よし、じゃあ何か・・・喉乾いた！(笑)」

女「え？(笑)」

ジ「コーヒー飲みに行こ、そこへ」

女「え？(笑)」

ジ「そこそこそこそこ」

女「いやいやいや」

ジ「そこそこそこそこ。帰って何かあんの？用事」

女「まあ一応・・・」

ジ「絶対ないじゃん(笑)」

女「(笑)」

ジ「絶対ないよ、今の感じ。構ってよ、友だちいなくて仕方ないんだよ(笑)」

女「いやいやいや」

ジ「友だちいなそうやろ(笑)」

女「いや、そんなことない」

ジ「じゃ、30分だけ。お茶1杯飲んでね、つまらんかったら帰っていいから（笑）」

女「お金、あんまりないんですよ」

ジ「いや、コーヒーぐらいおごるよ（笑）」

女「（笑）」

ジ「じゃあ問題ないな。じゃあもう解決だ。行こ（笑）。何聞いているの？そういえば」

女「AAA（トリプルエー）です」

ジ「あー、もう何曲かしか知らん」

女「あーみんな多分そんな感じですよ」

ジ「何の曲？アルバム？」

女「いや、新曲です。最近の」

ジ「あ、じゃあ相当好きじゃん（笑）」

女「（笑）そうです」

ジ「なんだっけ、恋音となんだかっていうのしか……」

女「ああーみんなそれぐらいしか知らない（笑）」

ジ「それぐらいしか知らないおれも（笑）。じゃ、ライブとか行くぐらい好きなの？」

女「はい、行きますよ。好きなんです」

ジ「これ、どこから入るの？」

女「いや、分からないです。初めて入るんで」

ジ「おれも初めて入る（笑）。なんか最近できたんだなーとか思いつつ」

女「ああーそうです」

ジ「そんな好きなんだ。全国追っちゃうんだ。あ、こっちカフェってわけじゃないんだ。あ、こ  
っちがオッケーだよみたいな。ああ、中空いてるね。そんな貧乏なの？」

女「うち給料前で……」

ジ「ああーそうなんだ（笑）。ライブ行き過ぎた？」

女「いや、ライブ行きすぎじゃない（笑）……飲みに行きすぎて」

ジ「ああ、酒好きなん？」

女「いや、好きじゃないんですけど、みんな違う友だちとかが多くてるから……」

ジ「ああ、お誘われが多いんだ」

女「そうなんです（笑）」

ジ「あれ、3月の最後だから？」

女「あ、どうなんだろう。結構みんな、『今日ヒマ？』みたいな感じで」

ジ「あ、友だち多いんや」

女「（笑）」

ジ「うらやましいな（笑）。おれ、ほんま友だちいないからなあ……。ピンク好きなんだね。ピ  
ンクでピンクで……ピンクでしょ？」

女「(笑)」

ジ「まあまあ。…ドトールだよね？」

女「そうですね」

ジ「スタバか？まいいか、今度飲まない？」

女「うーん、スタバのほうが…」

ジ「何にする？」

女「カフェオレで…」

ジ「カフェオレにする？ホット？アイス？アイスのカフェオレ？サイズは？L？」

女「いや、Mでいいです(笑)」

ジ「(笑) さすがにデカイか

店員「お会計は別々になさいますか？」

ジ「あ、一緒にいいですよ。カフェオレ？カフェオレのアイス…ハニーしかないよね。これでいい？アイスハニーカフェオレのM二つ」

<店員と応対>

ジ「あ、ストローとかいる？ストローはあるのか。あ、もういらねえか。ハニーいうから」

女「甘い…」

ジ「タバコは吸う人？」

女「いや、吸わない」

ジ「おれも吸わないからいいや。そっちにしよう。ここでいい？」

女「ううん、隣…な感じ(笑)。隣な感じだから、ちょっと離れ…くっつき過ぎですよ(笑)」

ジ「(笑) なんか対面もアレだなと思って。対面緊張しちゃうから」

女「いやいやいや(笑)」

ジ「なんで？なに否定？」

女「(笑)」

ジ「はい」

女「あーありがとうございます」

ジ「いえいえ。はい、プレゼント」

女「(笑)」

ジ「びっくりした？」

女「いや、ほんとに(笑)」

ジ「誰コイツって」

女「えーとか思って(笑)」

ジ「何だろうな…おれもびっくりしたわ(笑)。衝動にかられた(笑)」

女「(笑)」

ジ「学生？」

女「いや、フリーターです」

ジ「あーそうなん。学生なんてこんな派手なの付けないわな。混ぜるタイプ？あ、下に…何コレ。ハニーとか牛乳と蜂蜜…甘党っぽいもんね」

女「いや、甘いのが好きなので(笑)」

ジ「でしょう。そんな顔してる。おれもメッチャ好き、甘い。太っちゃう…メッチャ甘！思ったより甘くない？」

女「いやまあ確かに。結構普通に甘いです」

ジ「メッチャ連絡くるの？」

女「いや、友だちのタイムラインにコメしちゃったから(笑)」

ジ「あ、返ってきたんだ(笑) 1タイムラインやから…LINEか？」

女「そうです」

ジ「最近気づいたんだけどAAAってイケメンが多いんやな？」

女「まあ、そうですね。いや別に人が好きってわけじゃないんですよ」

ジ「歌が好きなの？」

女「そうです。基本。あと女子メンバーは可愛いから」

ジ「おーなんかオシャレやな。最近で感じるもん」

女「(笑) そうなんですよ」

ジ「爽やか系やん」

女「そうですね」

ジ「爽やか系が好きなの？」

女「いや、うちは基本かわいい人が好きやから、そんな爽やか系とか…」

ジ「爽やかとかかわいいと近くない？そうでもない？(笑) EXILE系は嫌いだ？」

女「そうです。あんま好きじゃないです」

ジ「今までの彼氏って=どっちかって言うと=(00:10:43)かわいい系なの？」

女「うーん(笑) いや…そんなこともないです(笑)」

ジ「おっさんにモテそうだよ、でもね」

女「そんなことも…いやーどうなんだろう(笑) 分かんないです。おっさんとか関わりないから(笑)」

ジ「あ、そう？なんかおっさんにモテそうな顔してる。優しそうな顔してるやんか」

女「おっさん、そんな話しかけてこないですよ」

ジ「あ、そうなん。若い人に結構話かけられる？」

女「いやでも、夜すすきのにいたら、基本みんなかけられるじゃないですかね」

ジ「あ、そうなん？夜出歩かんから」

女「あー」

ジ「夜眠くて無理や（笑）」

女「いやまあ確かに。基本あんま出かけないし」

ジ「住んでるのすすきのなんだけどね」

女「え、そうなんですか？（笑）」

ジ「そうそう。豊水すすきの？」

女「ああー」

ジ「そう、あっちのほう。あっちのほう意外と静かだよ。川のほう」

女「ああ、住宅街ですね、結構」

ジ「そう。近くもなんか飲み屋あるけど、大人趣味みたいな」

女「あーなるほど」

ジ「そういう感じの飲み屋ばかりで。ガッツリ働いてるの？」

女「そうですね。基本、週一ですかね、休みは」

ジ「メッチャガッツリやん。今日はたまたま休みだったの？」

女「いや・・・」

ジ「仕事終わり？」

女「仕事終わりです。うち、今日1時に終わったんですよ。なんか4月結構暇なんで、なんか・・・朝から昼までぐらいです」

ジ「ふーん、3月が忙しいんだ。やっぱり」

女「そうですね」

ジ「へえー。服装も春になってきたしな」

女「（笑）そうなんですよ。でも寒いんですよ、まだ」

ジ「（笑）なんか難しいよな」

女「（笑）」

ジ「そうなんですよ・・・。だいたい遊ぶのこの辺だ？」

女「そうですね。」

ジ「あそこの図書館行ってきたよ。なんか・・・分かる？」

女「ありますよね。行ったことないけど」

ジ「鞆なんか本でメッチャ重いやんか、ほれ。本だらけ。恥ずかしいから見せへんけど」

女「（笑）何でそんな・・・」

ジ「何やろ・・・。歴史とか好き？あんま好きじゃないか」

女「あんまり・・・。友だちが結構好きな人もいますけど・・・」

ジ「女のコ以外多くない？なんかね、戦国武将好きみたいな」

女「ああ、いますね友だちに」

ジ「意外とそうかなと思って話題を振ってみたけど、あんまだったな・・・」

女「（笑）そんなに・・・うちは好きじゃないかな」

ジ「AAAにゾッコンなの？他に何も無いの趣味とか？」

女「基本ないんですよ。普通に音楽聴くのは、まあ誰が好きってわけでもないけど、なんか普通に曲がいいなって思ったものは取るみたいな感じで、それで聞いているから。音楽は好きなんですけど」

ジ「聞く専門？」

女「そうですね。基本」

ジ「ライジングサンとか行かんの？あれ、そろそろだよな？6月とか5月だよな？」

女「そうですね。行かないですね」

ジ「ああいうの行かないんや？」

女「うーん」

ジ「大変そうだよな。なんかね。みんなさ、結構本格的じゃない？」

女「いや、確かに（笑）」

ジ「えーそこまでみたいなの。泊まりで行くんでしょ、あれ。2泊3日とか。なんかキャンプみたいな感じで」

女「たぶんそうですね」

ジ「そうだよな…。なんか昔…おれ、麻布住んでたやんか。何年か前に、3年～4年ぐらい前か。で、最近また戻ってきたんやけど、あっちからだとライジングサンに行くバスみたいなのがあつてさ、みんなガッツリ、バックパッカーみたいなのすごいでかいリュック持ってさ。こんなガッツリ行くんだと思って。みんなヘトヘトの顔して帰ってくんだよな（笑）。そこまでみたいなの。そんなに…」

女「でも楽しいんですかね？」

ジ「楽しいんじゃない？やっぱり好きな人って。海外とか1週間とかで行くよな」

女「ああー。楽しそうですね。今、うちはいいかな別に（笑）」

ジ「けっこう根暗な性格だからあんなにはしゃげないよ」

女「（笑）」

ジ「はしゃげる？ライブとか行ってさ、前のほうとか行ったらはしゃいでる人、後ろで静かに見たい人がいるやんか。どっち？後ろ側？」

女「いやまあ、基本そんなに騒ぎはしないんですけども…」

ジ「おれは前は行けないな。ライブとかできないもん。なんか分かるよな（笑）」

女「近くで見るにはいいかもしれないですけども、騒ぐのはそんな…ないかな（笑）、みたいな」

ジ「AAA好きだったら別にビジュアル系とか好きじゃないか？」

女「うーん、そうです。あんまり分かんないです」

ジ「ビジュアル系のライブ、激しいイメージあるから」

女「（笑）そうですね。あれは行ったことないです。さすがに」

ジ「きつついよなーあれは」

女「（笑）全然、一人で浮きそう」

ジ「(笑)間違いない」

女「本当に」

ジ「結構モテる人？」

女「(笑)モテないですよ」

ジ「モテない？ぽっちり二重なのに？」

女「いや・・・だからモテるってわけではないですよ、別に」

ジ「なんかおっとり系だからモテそうだけどな」

女「あんまり男子と出会いがないですから、そんな」

ジ「あー、職場もあんまりないの？」

女「そうですね、基本女ばっかだから。いないです」

ジ「ふーん、いないんだ。大体なんかさ、ああいうの行ったら、グループみたく女の子いっぱいいたらさ、1人ぐらい合コン持ってくる人みたいな・・・積極女子みたいな(笑)なんか、いないんだ？」

女「いないです」

ジ「あーいなかったらきついね」

女「そうですね」

ジ「だいたい何か知ってる人の話聞くと1人いる感じで(笑)積極的な女子ってみたいなの

やっぱ出会えないよね。おれも普通に働いてると全然ないもん」

女「ほんとないんですよね」

ジ「自分から動かなかったら多分おれ、ずっと独身な気がする(笑)」

女「ええ、うちもそんな気がします」

ジ「だよな。普通にしたら絶対出会えないわ」

女「20代では結婚したいんですけど(笑)絶対無理な気がして」

ジ「何歳まで？25歳までとか？」

女「そうですね。25歳までにはしたいなと思ってんですけど、相手がいないからまあ・・・」

ジ「あ、今いないんや」

女「絶対無理ですね」

ジ「あと何年猶予あんの？」

女「今・・・3月で20歳になったんですよ(笑)」

ジ「ああー。じゃ全然余裕じゃん」

女「え・・・でも一絶対あつという間に過ぎていく気がして(笑)」

ジ「まあねえ。でも同棲してから・・・1年ぐらい同棲すれば、なんか結婚的な雰囲気になるやんか。そう考えれば24歳まで。(笑)あ、こいつだみたいな感じの見つければ」

女「いや、絶対無理ですよ、そんなん」

ジ「どうしたん？(笑)最近何、恋愛しなすぎてなんかアレなん？」

女「(笑)いや・・・ほんとに」

ジ「足何？生足？ストッキング履いてる？」

女「いや、はいてますよ。さすがに寒いですよ」

ジ「ああ、ならまだ大丈夫だよ。それ生足だったらほんまに寒いやろなと思って。寒い言っ  
てたからさ」

女「いやあ、さすがに。風ちょっとあつて・・・」

ジ「風強いよね。この辺ね。上出たらメッチャ寒いよ」

女「いや、ほんとに。昨日が一番ヤバかったですよ」

ジ「おれも薄着しすぎたと思って。ミスった。昨日メッチャ寒かったな」

女「いや、そうなんです。雨だったし」

ジ「仕事帰りも雨でびしょびしょになってさ。スーツ」

女「(笑) あー」

ジ「マジ最悪やったわ。・・・髪ちゃんと染めてるんやな？」

女「3月の最初ぐらいに染めたんですよ。結構ヤバかったんで、色(笑)」

ジ「プリン？」

女「ほんとに。すぐなんかなるから。でも友だち染めてもらってるんですよ。いつも」

ジ「あ、そうなん？友だちって美容師さんとかの？」

女「いや、全然何も関係ないんですけど」

ジ「あ、そうなの。上手だね」

女「そうなんです。キレイに染めてくれるから自分でやるよりは全然いいかなと思って  
(笑)」

ジ「ああー。まあ、自分でやるとね」

女「1回美容室で染めたいと思うんですけどね。でも全然染まんなくてメッチャ明るいやつ  
にしても全然・・・」

ジ「美容室でやったら？」

女「いや、普通に自分で最初染めたとき。えーヤバいと思って。とりあえずメッチャ・・・いつ  
も使ってた種類と違うやつ使ってみたんですよ。それでメッチャ明るくしたっけ、これぐ  
らい染まったから、まあいっか・・・」

ジ「結構染まってない？自分でやってる割にあんまり痛んでないね」

女「そうですね。でも結構ヤバいんでね。いや最初もう、すごいサラサラだったんですけど、  
最近もうなんか(笑)・・・」

ジ「あ、元がすごいサラサラなんだ？」

女「そうなんです。お母さんが・・・」

ジ「サラサラヘアー？うらやましいな。あ、栗毛なの？」

女「なんか・・・そうですね。猫毛ってよく言われましたね(笑)」

ジ「顔はパンダ顔なのにな」

女「(笑)」



ジ「あんまカフェ来ない？」

女「あんま来ないです」

ジ「飲みばかり？」

女「たまに…まあ昼間友だちと遊ぶ時にスタバとか行くぐらいで。でも持ち歩きだから、そんな、こんなにこうやって座って話すことはあんまないですね、カフェで」

ジ「落ち着かない感じだ（笑）」

女「（笑）最近なんか…うーん」

ジ「だいたい遊ぶって言ったら飲みになるの？」

女「そうですね。カラオケとか」

ジ「おー。AAA歌うんやな」

女「（笑）そうですね」

ジ「ずっとこっちの人？」

女「そうです。札幌です」

ジ「20年間？」

女「そうです」

ジ「へー。じゃあ詳しいな」

女「でも…ま、そうでもないですけどね」

ジ「もうこの辺しか分かんない。職場も札幌のほうだからここばかり」

女「ああ、うちも札幌ですよ（笑）」

ジ「ああ、そうなん。住んでるのも、札幌のほう？」

女「いや、住んでるのは宮の沢です」

ジ「ああ、ごめんな」

女「（笑）」

ジ「ボケてるね（笑）さっきからちょっと…おれ、年なんかもしない。宮の沢だと…でもじゃあ、全然普通に楽だよな。地下鉄で札幌のほうだから。札幌あれだ、東西線通ってないもんね」

女「はい。乗り換えあるんですけど、まあそんなに…」

ジ「でも、歩いて5分とかくらいだもんね。だから全然…このへんが楽だよな、確かに。雪も少ないし。年末ぐらいに来たんだけどあんまないもんね。こっちのほうね」

女「いや、そうですか？」

ジ「うん。…実家？」

女「はい」

ジ「おお。じゃあ楽やん。ほとんど遊び賃や？」

女「（笑）とりあえず1人暮らしはあんまする気ないっていうか、あんま考えてない」

ジ「できない？」

女「なんか…ほんなら誰かと一緒に住んだほうがいいかな」

ジ「寂しがり屋だ」

女「(笑) なんか、怖くないですか？(笑)」

ジ「なに、ストーカー被害にあったことあるの？」

女「いや、ないですけど」

ジ「なに、何が恐いの？」

女「いやなんか・・・お化け(笑)」

ジ「あ、お化け？(笑) 苦手な人や。お化け屋敷入れん・・・ホラー映画とか無理や」

女「いやほんとに。グロいのと・・・」

ジ「グロいのも無理なん？ゾンビ系も無理？」

女「いや、本当に...全部ダメ。血とかダメです」

ジ「絶対看護師さんとかなれないな」

女「(笑) いや、そうなんです」

ジ「メルヘンなほうが好きやな」

女「(笑) メルヘンすぎるのも『えっ』て思うけど」

ジ「マイメロとか無理？」

女「いや、それは大丈夫です。サンリオは好きです」

ジ「あ、サンリオいけるにはいける？」

女「全然」

成宮「ちょっと顔マイメロに似てるもんな」

女「(笑) マイメロ・・・」

ジ「言われたい？似てない？でも」

女「(笑) 言われたいですよ、さすがに」

ジ「何に似てるって言われる？マイメロ以外で」

女「何に似てる(笑)・・・」

ジ「パンダとマイメロに似てるなっておれ思ったよ」

女「リスとうさぎはよく言われます」

ジ「あー・・・そう？」

女「キャラクターでは喩えられたことないです」

ジ「(笑) 人は？」

女「人？」

ジ「お母さんとかやめてな(笑)」

女「ともちんとかよく言われる(笑)」

ジ「ああー、それは分かる」

女「ともちんとぱるるを足した顔みたいな」

ジ「ああー、目元が似てるな」

女「でも、ぱるる好きだったら嬉しいですけど、それは」

ジ「ばるる美人やんな」

女「うん。かわいい」

ジ「ともちんなあ、なんかいじってる感じあるから、整形顔ってこと？」

女「整形してないんですけどね、なんも」

ジ「目、パッチリだよな」

女「これもお母さんの遺伝なんです」

ジ「そう、お母さん美人なんや」

女「メッチャ目でかくて。まあ、うちの家族みんな目でかいんですよ」

ジ「うちと一緒や」

女「(笑) 目、おっきいんですけど」

ジ「二重でかいもんね。うちのも全部・・・」

女「よく女子にうらやましがられるけど、そんな・・・(笑) 全然そんな・・・だから二重にするものとか使ったことないから・・・」

ジ「アイプチとか？一切やってないの？」

女「なんも。『それ、どうやって使うの』って言ったら『イヤミか』ってよく言われる(笑)」

ジ「(笑) ツケマとかも、じゃあしないんだ？」

女「いや、しないですね」

ジ「じゃあ、楽でいいね」

女「普通に。目もあんまいじないから」

ジ「じゃあ朝起きたら、ちょっとファンデ塗って眉毛描いて終わり？」

女「いや・・・」

ジ「5分で終わるやん。化粧は」

女「うん、そうですね(笑)」

ジ「あんましてないのか、化粧」

女「うん、あんまり。ファンデとチーク、リップ・・・そこらへんしかしないですよ」

ジ「ああ、いいねえ。スッピン見てがっかりようがないやん(笑)」

女「そうですね。基本そのままです」

ジ「顔立ちくっきりな子のがええよな。スッピン見てあれになったら・・・」

女「いや、確かに(笑)」

ジ「ま、男はないもんね。逆に。顔・・・見た目で付き合ってからがっかりとかはね。内面か」

女「あー」

ジ「釣った魚にエサはやらないみたいな話(笑)」

女「内面は・・・あるかもしれないけど、それはまあ、女子も変わらないと思うけど」

ジ「あ、作るタイプ？」

女「いや(笑)、素ですよ、ほとんど。作ることができなくて」

ジ「ああ、おれも出来ない」

女「（笑）」

ジ「このまんまや（笑）。作る女子どうだろう、見破れないのかな。おれ今まで付き合った人は全員いなかったな」

女「ああーそうですね」

ジ「あった？男で？」

女「いやー何考えてるか分からないとかはあったけど、そんなに・・・（笑）」

ジ「ほんとに好きなの？みたいな」

女「（笑）うーん、でも別にそこまではなかったかな」

ジ「ふーん。結構続くタイプ？・・・（携帯入電）大丈夫だよ、出な」

女「ずっと・・・いや大丈夫。いつもだから」

ジ「いつも？」

女「（笑）」

ジ「タイムラインの子？」

女「いや・・・違う。なんかおばあちゃんがいるんですけど、なんか小学校ぐらい、うちが中学ぐらいまで、家に来てたんですよね。で、一緒に住んでたんです。おばあちゃんとおじいちゃんと、そのせいが抜けないのか寂しいのか分からないけど、毎日電話くるんです」

ジ「おばあちゃんが？」

女「（笑）ほんとに・・・なんて言うんだろ、心配性って言うのか、寂しがりって言うのか分からないですけど、ほんとに」

ジ「あ、もう今は別々なんだ」

女「そうですね。うちももう・・・全然高校生だったから、そんな時。高校生だし、うち弟いるんですけど、弟ももう中学ぐらいだったんで、もう大きいし、もう・・・そんな兄ちゃんみたいな・・・感じで」

ジ「寂しいだろうね、いきなりいなくなったから。かわいい孫やって・・・」

女「（笑）」

ジ「おじいちゃんはおるん？一緒に」

女「いや、おばあちゃんとおじいちゃん一緒に住んでるけど、おじいちゃん、よく遊びに出かけるから、（笑）昼間」

ジ「ああー遊び人なんや。ああーそれで」

女「よく釣りとか行ったり碁行ったりとかするんですよ。囲碁とかやるんです」

ジ「多趣味おじいちゃんや」

女「（笑）だから、おじいちゃんいない時とかかけてくるんですよね（笑）」

ジ「うーん、寂しいんやな」

女「でも、毎日同じ事しか言わないから、もうほんとに。こっちからしたらほんとうんざりで誰も出ないときもある」

ジ「同じ事？何を言うの？『元気かーい』って？『大丈夫かーい』って？」

女「(笑) いや、もういっつも聞いてるんだから一緒じゃんみたいな感じで思いますけどね」

ジ「共通の話題とかないの？」

女「ないです。それだけ聞いて安心して切るんですよ、毎日(笑) 意味が分からん」

ジ「なんやろ、別にちょっとなんか痴呆入ってるとかそういうのじゃないんでしょ？」

女「そうですね」

ジ「ほーん、そうなんや。うちのばあちゃんは痴呆入ってるから何言ってるか分からん」

女「(笑)」

ジ「この前帰ったら何言ってるか分からんかったもんな。ご飯とか多分…カレー作ってあげてん。ばあちゃんにね。で、カレー作ってあげて、ばあちゃん結構量食べるんだよね。これぐらいの皿にほんと山盛りだよ」

女「へえー」

ジ「ご飯2合ぐらいを食べちゃって、それで食べさしたあとに片付け終わって、『おいしかったかい?』って聞いたら『ご飯』って言われて(笑)。『喰ったやん』って言って」

女「いや、でも…ううん」

ジ「だからボケると大変だなと思って」

女「そうですね」

ジ「うん…食べたかも分からないやろ」

女「えーそんなに食べたら…」

ジ「メッチャ食うよ。おれと食っても吐くぐらい食べてるよ、ばあちゃん。すごいなあ。ボケるとそのへんの機能もなんかね(笑)。分かんないよね、お腹張ってるとかね。不思議やったなあ。…O型？」

女「いや、AB型です」

成宮「あ、そうなんや。垂れ目の人ってO型って聞いたけど…ウソか」

女「(笑) AB型ですよ」

ジ「でもO型と思ってO型が違ったらAB型の法則ってあるの知ってる？」

女「そうなんですか?全然知らない」

ジ「意外にそう。AB型はO型を装うってことかな。付き合う人は何型が多いとかある？」

女「特にはないですね。そんなの。みんなバラバラだった気がする」

ジ「ほー」

女「O型がB型か…どっちか」

ジ「じゃあおれO型やからチャンスあるな」

女「(笑) えーでも気にしたことないんですけど、そんな…血液型は」

ジ「でも結構性格出ない？」

女「うーん」

ジ「B型の人、結構マイペースで自己主張強いよほとんど。上のほうから引っ張られる感じが

好きなん？」

女「まあ、そっちのほうがいいですね」

ジ「なよなよしてたら無理？」

女「あーそれは（笑）。なんか、どうしていいか分からなくなっちゃう（笑）」

ジ「（笑）」

女「（笑）」

ジ「二人でどうしていいか分からなくなっちゃうな。一番続いた人でどれくらい続いたの？」

女「一番続いたので…どれくらいだろう。1年は行ってないですね」

ジ「うーん」

女「一番短い人で1カ月（笑）」

ジ「おお、超短いな（笑）あつという間だったな」

女「あれはほんとになんかもうさすがに…」

ジ「何それ、どういう経路で付き合ってたそうなの？1カ月って。普通のなんか学校とか？」

女「いやーなんかちょっと無理だなと思って。いやーなんだろ、サイトであった人なんですけど…」

ジ「フェイスブックとかそういう？」

女「うん、そうですね。で、何回か会って…」

ジ「付き合わん？って言われたの？」

女「って言われて、普通に嫌いでもなかったからいいやって思って付き合ったんですけど、すごい束縛激しくて」

ジ「ああ、もう『何してんの？』みたいな？」

女「（笑）いや、ほんとに。夜中なのに『会いたい』とか言われて、いや、無理だけどみたいな。実家だし無理だし、みたいな」

ジ「（笑）すごいね」

女「いやーそれでももう無理だと思って、1カ月の記念日に別れました（笑）」

ジ「記念日だねって言って別れたの？」

女「（笑）いや、記念日だねも、もう言わなかったね。もうやめようみたいな感じ（笑）」

ジ「あー無理やなって。とりあえず1ヶ月みたいな感じで、試してからみたいな。すごいね夜中に。こっちの立場考えてくれないと」

女「そうなんです」

ジ「自己都合ばかりなんだ」

女「そうなんです。ほんと自己中。本当に無理だなと思って」

ジ「イケメンやった？ルックスも普通？なんかあんまやし、中身もありやしみたいな」

女「（笑）」

ジ「そっか。それはドンマやな」

女「（笑）」

ジ「一番最近のは？」

女「最近もういないですよ。だからその人が最後ですよ」

ジ「ほー、結構前？」

女「去年の5月ぐらいですね」

ジ「あ、1年記念日じゃん、もう少しで（笑）」

女「そうなんです。だからもう・・・」

ジ「あ、本当に出会わないんだね」

女「そうなんです。この仕事になってもうほんとに・・・もうちょっと学生時代に恋愛しとくべきだったって（笑）ほんとに」

ジ「高校はでも共学？」

女「そうですね。で、専門学校まで行って・・・専門学校の男子も、だけど・・・そんな好きじゃなかったし（笑）」

ジ「それも1年間だったの？」

女「1年ですね」

ジ「そっか。専門・・・何の専門行ってたの？」

女「製菓っていう・・・調理の」

ジ「ああ。女の子多そうだね」

女「そうなんです。で、製菓のクラスだったので、男子とか10人いないぐらいで、だから全然ダメで（笑）」

ジ「10人なら微妙だよ。なんか・・・やっぱ20～30人いて1人じゃないの？」

女「でも、それなんか・・・調理系のほうが男子多かったけど、そんなにかかわりないしみたいな（笑）製菓系の男子はそんなにいないしなみたいな、逆にウザイのしかいないし」

ジ「ウザイ？（笑）どんなやねんウザイって」

女「だからあんまり...いいやと思って。ここ1年だし、みたいな」

ジ「いい男探すの難しいよな」

女「いやーそうなんですよねー」

ジ「なかなか難かしいよね。恋愛の相手探すのね」

女「そうなんですよね」

ジ「あんま別に誰でもいいわけじゃないし」

女「友だちとしてはいいけど恋愛はちょっとみたいなのが多くて、周り（笑）」

ジ「恋愛になるとね。結構一緒にいたりするからな。あんまストレスかかるの嫌だしね」

女「そうなんですよ」

ジ「年上のほうが、でも好き？」

女「そうですね。下はあんま好きじゃないです」

ジ「年下って言ったら高校生だもんね（笑）。捕まっちゃうよ。下手したら（笑）」

女「タメでもいんですけど、タメもガキっぽくて、ほんとに…」

ジ「うーん…男の20歳はそうやね。過去を思い出しても今以上にひどいわ。うん…大体は。25歳ぐらい？」

女「そうですね。基本それぐらいがいいかな」

ジ「ほうほうほう。よかった、じゃあ25歳ぐらいで（笑）」

女「（笑）」

ジ「そらそやな、年上。おれはもうバラバラやけど。年上の可愛い系？」

女「可愛い…いやどうなんだろう、いや、どうだろ。タイプとかあんまないんですよ、そんな。…分からなくて、最近、優しい人ならいいかなみたいな（笑）とりあえず」

ジ「あー難しいな（笑）そのワード出されると困るよな（笑）優しい人…すぐ怒ったりしない人な」

女「そうですね、基本」

ジ「AAAみたいな人？」

女「いやAAAは（笑）…中身分かんないですからね、あの人たちは」

ジ「まあね」

女「見た目しか分かんないし」

ジ「あのボーカル？漫画家のなんか…長身のイケメンみたいな、あれがメインボーカルなの？みんなあれ歌ってるの？何も分かってないんだよね」

女「そうですね。みんな基本歌ってるんで。メインは西島っているんですけど、札幌出身なんですよね」

ジ「あ、そうなんだ？」

女「その人がメイン。それと、リーダーがいるんですけど、その人と女子メンバー」

ジ「ふうん」

女「あと周りはダンス中心な気がする。あとラップの人1人」

ジ「あ、ラップもいるんだ。AAAなんか有名な曲しか知らんからなあ。なんかみんな爽やかやなと思ってたけど、それだけ（笑）」

女「そうですね（笑）」

ジ「爽やか系だよな。だよな。AAAの誰かにいっつも似てるって言われてたんだけど誰だろうな。誰か似てる？（笑）」

女「誰だろう（笑）」

ジ「似てない？パンダに似てるってよく言われる？」

女「（笑）」

ジ「ガチャピンに似てるとも言われる？」

女「いや（笑）」

ジ「あ、ミニーちゃん？」

女「ミッキー」



ジ「ミッキー好きなの？プレゼント？」

女「違う、普通にかわいいから買ったやつ（笑）」

ジ「ディズニーランド？」

女「いや、普通にドンホです（笑）」

ジ「（笑）意外なとこきたな。正規品？これ？見ていい？」

女「普通の…普通にミッキーですよ」

ジ「なんかあるやん、中国製のダズニーみたいな（笑）。ディズニーっぽいけどみたいな」

女「なんかあれですよね」

ジ「ダッフィーとかなかった？お祭りとか行ったらさ…なんか正規品って足の裏の形がなんかあるやんか。で、なんか微妙に違うっていうんで」

女「なんか似てるけど違うみたいなのありますよね。ゲーセンとかにもよくある」

ジ「よくあるある。ダッフィーじゃなくて、ディッフィーみたいな」

女「（笑）可愛いけどパクリかみたいなの」

ジ「そうそう、意外にたいな。なんか騙された感あるよね」

そやねんな。なんでもいいっちゃいいやねんけど、チープ感がなんかな、気分的に良くないよね」

女「そうなんですよ」

ジ「終わるのはだいたい1時くらいなの？いつも」

女「いつもなんか忙しいとかになると…4月は暇だから早いけど、基本4時とかかな…朝から4時とか夕方ぐらいまで」

ジ「夕方ぐらいまでなんだ」

女「はい」

ジ「朝早いんだ、じゃあ8時とか」

女「7時なんです」

ジ「あ、朝早いじゃん（笑）」

女「（笑）本当に5時起きなんですよ、毎日」

ジ「じゃあなんか製菓系とか何か作ったりする系なの？」

女「そうです。ケーキ屋さんなんです」

ジ「あ、作るの？」

女「はい」

ジ「すごいね」

女「いや、そんな昔事やってないです」

ジ「女子力高いやん（笑）」

女「全然」

ジ「1から作るの、あれ？」

女「いや、違う…タルトの店なんです。台があって、それは工場から来て、その上になんかクリ

ームとかそういうのを…」

ジ「デコレーション系なんだ」

女「そうです。仕上げとかそこら辺はやるんです」

ジ「じゃ、ほんまお菓子好きで入った感じなんだ。最初は」

女「いや、そんなこの前まで…まあまあ確かに」

ジ「高校生くらいの時に好きで…」

女「なんか親にまず薦められて、『こういうの、あるつき入ってみたら』みたいな感じで、全然将来決まってくなくて本当に。でも就職も高校の時だとなんか早いしなあと思って、とりあえず専門学校1年ぐらい行くって言って…」

ジ「で、考えてみようかな、みたいな」

女「そうですね。まあ、別に作るの嫌いじゃなかったしケーキとか、だからまあいいかなと思って入って…。でも普通に専門学校の実習とかで『いや、もういいわ』とか思って（笑）」

ジ「これ毎日かあみたいな」

女「いやほんと飽きるぐらい作らされたから」

ジ「働いても飽きるぐらい作るもんね」

女「そうなんです。でも無収とかキツいから仕事はしなきゃなと思って、とりあえず入ったんですけど」

ジ「悩める年頃なんや」

女「でもやりたいこともないし、でも仕事のみんなも雰囲気よくて好きだから、まあ楽しいし、今はいいかなって。とりあえず」

ジ「難しいよね」

女「一人暮らしするってなったら、またちゃんと働かなきゃいけないと思うけど、今の給料じゃちょっとやっていけないから（笑）」

ジ「まあ、ライブも行けんくなっちゃうからなあ（笑）」

女「なんでわざわざ給料いいところ行かないといけないんですかね？今はまだ実家だし、まだあんま考えてないんですよ、ほんと」

ジ「料理は好きなん？」

女「まあ、好き…ですけど、あんましないですけど（笑）」

ジ「家で作るぐらいか？仕事で毎日ね」

女「やっぱ家でなんかオーブンとかなんかなくて、レンジとオーブン一緒になったやつがあるんですけど、なんかオーブンに使う鉄板みたいなのがなくて、なくなったんですよ、急に。エッ？とか思って」

ジ「誰が何をしたん？（笑）」

女「分かんないですよ。急に無くなってもう使えなくてレンジしか使えないじゃんとか思って（笑）」

ジ「鉄板泥棒」

女「いやもう本当に。鉄板買わないと何も作れないんですよ」

ジ「そんなのあるんだ。レンジの中に入ってるの？ヘルシオみたいな感じ？」

女「普通に形は電子レンジなんですけど、オーブンのクッキーのなんか＝タネがある＝  
(00:42:36)とか、いろいろあって使えるらしくて。お母さんがよく作ってくれてて、クッキーとかそれで。だから作れるはずなんですけど、でもその鉄板を誰かなくしたから（笑）」

ジ「誰かって誰やねん」

女「気付いたら無くなってた。前まであったのになあ」

ジ「結構そう…良さそうな感じ。高いんやろ？」

女「でもだから鉄板だけでも売ってると思うんですけどね」

ジ「取り寄せなきゃいけないの？」

女「多分…」

ジ「ふうん。お菓子作り、結構なんか機材いるんだよね」

女「そうなんですよ」

ジ「本格的になればなるほどな」

女「ほんとに。そういうのもまた高いし、家でそんな作らないし、作っても誰食べるの？ってなるし」

ジ「まあな。彼女に作ってもらって嬉しいけどなあ」

女「（笑）いやまあ、彼氏とがいたら別かもしれないですけど、あげる人もいないと、友だちといってもそんな。ま、実習で作ったやつとか専門学校の時、でもよくあげたりしてたんですけど、家近いんで」

ジ「バレンタインデーは？」

女「なんかあげてましたね」

ジ「配るんや。友だちとかに」

女「そうですね、結構みんなに配って」

ジ「バレンタインデーな。そういう時はテンション上がるけどな」

女「（笑）」

ジ「無駄にホワイトデー頑張ろうかなって」

女「（笑）」

ジ「最近デートしてないん？」

女「デートしてないですね。出会いのない人生だから」

ジ「やってるよ」

女「（笑）」

ジ「（笑）なんで笑う？」

女「いや、急すぎて今日は（笑）」

ジ「いやーおれも急だったわ。帰ろうかなと思ったもん」

女「いや、本当に（笑）」

ジ「おれのマイチャリが止まってるからそこに」

女「(笑)」

ジ「チャリで十分や」

女「そうですね。すすきのに住んでたら全然」

ジ「車持ったらまた邪魔やからな？免許持ってる？」

女「いや、持ってないです」

ジ「どういうデートが好きなん？特にないな？」

女「いやあ、そうですね…でも」

ジ「のほほんデートか、アウトドアデートとかどれかよかね？」

女「ああどっちも好きですけどね。うち家っていうかお父さんがアウトドアの人なんで、よく毎年キャンプとか行くんですよ。だからけっこう外で遊ぶのも慣れてるし、家でのんびりするの好きだから、どっちでも楽しめます。全然」

ジ「キャンプ行ったことないなあ。彼女と行ったりするのかなみんな。行ったことないや」

女「キャンプ…でもあんま聞かないですよ。家族で行くしかないから」

ジ「せやな。結婚してからやなキャンプは。練習しとくわ。火は起こせるで。炭とかあればね  
(笑)」

女「そうですね。何かあったら起こせないです」

ジ「なんやろな、キャンプスキルなんやろな。あとテント立てたりとか？」

女「ああ」

ジ「大したことないよ、あれ」

女「でも、それぐらいですよやるとしたら」

ジ「あと熊出てきたらどう対応するかとか」

女「(笑) いや、見たことないですよマジで」

ジ「話かけたらいいととか」

女「(笑) 狐なら見たことあるけど」

ジ「まあ…」

女「急に出てくるって言う」

ジ「家の近くで？」

女「いや違う。普通にキャンプとか行ったら急にぱっとライトつけたらいるみたいな  
(笑)」

ジ「うちの実家、いつも出てくるよ。うちのおかんエサやってるから余計来んの」

女「(笑) それは来ますね」

ジ「ちょっと田舎なんだよね。旭川の結構はずれのほうなんだよね。だから、川が近くにあるんだよ。よく白鳥とかがとまるんだよね。で、結構田舎だからキツネとか、そういうちょっと野生動物が。あと放し飼いにされたカメとかいっぱい出てくんね」

女「えー」

ジ「ミドリガメ。縁日とかにない？こういうちっちゃいやつ」

女「あーあります」

ジ「あれがちっちゃい頃に子どもとかいたら買うやんか。これぐらいになったりするんだよね。で、ミドリガメの寿命って知ってる？」

女「知らないです」

ジ「85歳まで生きんねんて。だからしちめんど臭くなつてみんな川に離したりするんだよね。それでメッチャ増殖してるん」

女「いや、それはちょっと長生きすぎるな」

ジ「そう、メッチャ長生きするんだよね」

女「亀は長生きで1000年・・・って確か」

ジ「実家も実際にいるもん。メッチャ長い。目つきメッチャ悪いしさ。人殺しのような目してるんだ。生意気、ほんと生意気うちの亀。エサやっても睨み返ししながら早くよこせよみたいな顔してくるから、エサやりたくないな、なんかね」

女「（笑）は一」

ジ「本当になあ、あの亀。買った事ある何か？」

女「亀はないです」

ジ「犬とか猫とか」

女「いや、そういうの無い・・・何だっけ魚いましたね」

ジ「熱帯魚？」

女「熱帯魚的なやつ」

ジ「ああー難しくない？すぐ死んじゃったけど、昔」

女「いや確かに結構すぐ死にますね。でも、結構次から次へと飼ってたから、なんであんなに飼ってたのか分からない？」

ジ「熱帯魚を？あ、じゃあ水槽あるのちゃんとしたやつ」

女「うん、ありましたね。でも、もう今はないと思うんですけど、なんかあったと思う・・・なんか金魚鉢みたいな、なんかありましたね」

ジ「金魚鉢ってこんなんやで（笑）」

女「（笑）これぐらいの魚だったから、2匹ぐらい」

ジ「温度調節のやつとかもあった？なんかあれ、1度でも上がったからおれなんかは多分冬になった時に死んじゃってん。2~3度下がっただけで死んじゃったんだよね。こんな難しいんだと思って熱帯魚」

女「エサをあげてなくて共食いした事はあります（笑）あれ、気づいたら1匹いないんですけど」

ジ「あ、そうだ、共食いするんだよね。金魚共食いしたことあったわ。お祭りで買ったやつ」

女「本当にびっくりした。1匹いないんだけどかと思って」

ジ「魚すごいよね共食いとか。犬と猫は共食いをしないもんね」

女「(笑) 確かに」

ジ「動物は好きなん？」

女「基本、好きですよ。犬とかは。猫も」

ジ「猫は好きじゃないの？」

女「猫よりは犬のほうが好きですけども、猫も嫌いではないです」

ジ「じゃあ猫カフェ誘えないな」

女「(笑) でも一番はうさぎが好きですけど」

ジ「あ、うさぎカフェあるんやろ？」

女「ありますね」

ジ「どこにあるの？」

女「どこなんですかね。友だちが1回行ってるはずなんですよ。どこにあるのかな」

ジ「なんかこの辺にあるって聞いたんだけど。へえーどこにあるのか調べてみよか。うさぎカフェのうさぎ飼ってたことあるの？」

女「おばちゃんの1回飼ってましたね」

ジ「うさぎカフェ・・・おばあちゃん？さっきのおばちゃん」

女「いや、違います。お母さんのほうのおばちゃんが結構動物飼ってたんですよ。鳥とか」

ジ「南一の西一だから近くない？たぶんここだから・・・ここ大通りだから、大通りの多分公園の接してる感じのところ」

女「あー」

ジ「へえー。じゃあ今度行こうか」

女「(笑)」

ジ「なんで笑う！(笑)」

女「いや・・・」

ジ「でも夜、仕事7時ぐらいに終わるやろ？」

女「そうですね」

ジ「うさぎなでなでしに行こうよ。行ったことないようさぎカフェ」

女「いや、多分そうないと思います」

ジ「猫カフェはよく行くんだよね。前は新宿に住んでいて、東京の。あそこは猫カフェあるんだよね。すごいよ。サラリーマンもメッチャ来るんだよ」

女「えー」

ジ「でなんか、仕事とするやんか。パソコンとか。ぱって膝の上に・・・パソコンで仕事しながらなでなでする(笑) サラリーマンとかいたりして」

女「(笑) やばい」

ジ「ほんま猫好きいっぱいいるんやなと。こっちも大通りと麻布のやつ行ったことあるけどさすがにそんな人いなかったから」

女「いやま、さすがにそうですね」

ジ「東京はすげえなあ（笑）」

女「癒しなんでしょうね」

ジ「癒しなんやろね。猫カフェで仕事するってどんなや（笑）」

女「いやまあ確かに。まずそこですけどね」

ジ「うさぎカフェな・・・いいな。いつも何してんの？仕事終わった後。友だちと遊ぶ？」

女「まあ遊ぶか、何もなかったら普通に帰ってテレビ見て（笑）」

ジ「テレビっ子か（笑）」

女「それぐらいです」

ジ「ほうほう。じゃ近いうち行こう、うさぎカフェ」

女「そうですね、うさぎカフェ。初の」

ジ「初のうさぎカフェ。おれもデビュー」

女「（笑）全く、全然・・・友だちは楽しかったって言ってたから、楽しいんでしょうけど」

ジ「エサあげたりすんのかな」

女「そうなんですかねきっと」

ジ「なんか、食べるよ。ボボボボボッ」

女「（笑）」

ジ「すごい動きするよね。ボボボボボッ・・・」

女「んん、確かに」

ジ「ペットショップのうさぎ見るの好きなんだけどな」

女「ああ」

ジ「なんか1人ぐらいいない。このでっかい図太いやつ。何も動かないやつ、ずーっところや  
って」

女「（笑）」

ジ「結構、無趣味なんや」

女「そうですね。そんなにないですね趣味は」

ジ「好きな人できたら結構ハマりそうだけどな」

女「うーん、まあ・・・」

ジ「それでもないの？ハマったことない？」

女「ハマるといふか・・・」

ジ「メッチャ好き好きとかならんの？」

女「（笑）あんまならないですね」

ジ「そこまでハマらせてくれなかった？」

女「（笑）」

ジ「（笑）・・・少女漫画のような恋愛できんかったね」

女「まあ、そうですね。そんなのはないですよ。あるわけではないと思う（笑）」

ジ「憧れたりする？でも」

女「まあそんなに…あんま読まないですよ」

ジ「あ、そもそもない」

女「はい、あんまり…ドラマとかはよく、恋愛ドラマとかよく見るけど、別にそれが羨ましいとかも思わない（笑）」

ジ「諦めてる（笑）」

女「これはもうドラマの世界だからみたいなの。それでみんなキヤーキヤー言ったりするけど…」

ジ「結構冷めちゃう？」

女「（笑）いやまあドラマだからなーと思って」

ジ「ほー」

女「自分がそんないからみたいなの」

ジ「最近ときめいてないから（笑）」

女「ほんと何もないですね」

ジ「初めて付き合ったのはいつ？」

女「初めては高校かな？」

ジ「高校1年とか…」

女「高校2年くらいかな」

ジ「あ、ちょっと遅めなんだ」

女「そうですね。基本、本当に男子みんな嫌いで、うち」

ジ「ああ、オトコ嫌いなの？」

女「（笑）いや、嫌いだったんですよ本当に、ガキ臭くて本当に。ずっと先生が好きだったんですよ。小学校のころから高校まで」

ジ「あ、同じ先生だったの？」

女「いや違うんですけど、小中高と全部違う先生なんだけど、本当に必ず一人はいたんです。好きな先生が」

ジ「へえー。で、何かあげちゃったりとか、プレゼントとか？」

女「普通にバレンタインあげて、誕生日プレゼントもあげたりしてましたね。先生に関してはこっちから行かなきゃいけないなと思って」

ジ「ま、確かに（笑）。禁じられた恋やもんな」

女「（笑）」

ジ「なんかあったりした？」

女「いやでも高校の時に、最後の卒業式にアドレス聞いて、その後に1回遊ぼってなって」

ジ「ほおー」

女「先生がドライブで小樽行こうってなって…行かなかったんです（笑）」

ジ「行かなかったの？何で？（笑）」

女「いやなんか、冷めちゃってその時には」



ジ「ああ、あくまでも先生だからよかったんだな。芸能人みたいな感じやな」  
女「なんかもう別にいいかなみたいな（笑）」  
ジ「なんじゃそれ、ダメじゃん」  
女「それでちょっと用事できたっていう嘘をついて（笑）」  
ジ「先生もメッチャ期待してたかもしれんやん。基本はめんどくさがりだ」  
女「そうなんですよね。めんど臭くなっちゃって途中で。だから・・・」  
ジ「最低じゃん（笑）先生もしかしたら本気になってたかもしれない」  
女「結構若い先生だったんで、また。先生になったばかりの人で」  
ジ「あ、その人？じゃあ23歳とか24歳？」  
女「23歳でした」  
ジ「じゃあほんと期待してたかもしれないよ」  
女「（笑）いや、メアドはまだあるんですけどね。でも、メールもうすることないし、もう（笑）」  
ジ「ほー」  
女「あんま帰ってこないっていうのが本当に嫌、もう待ってられなくて」  
ジ「あ、返ってこなかったんだ。そもそも」  
女「なんかあんまり返ってこなくて、工作中だから仕方ないかもしれないけど」  
ジ「ああ、仕事終わったとしても？」  
女「なんかあんま返ってこないし、次の日に返ってきたりするんで、なんかもうめんどくさと思って（笑）」  
ジ「あー」  
女「余りもしてないしメールとかも、もう迷惑メールひどくて、する気もないんですよ。誰とも」  
ジ「LINEとかじゃないの？」  
女「LINEやってなかったんですよ、先生、その時」  
ジ「あ、当時はな。結構最近やもんな」  
女「いや・・・」  
ジ「ここ2年ぐらいかLINEは」  
女「そうですね・・・だから」  
ジ「先生やってないんだ（笑）」  
女「やってなかったから」  
ジ「2年ぐらいだよ。ライン流行ったの」  
女「（笑）多分そうですね」  
ジ「先生やってないんやな」  
女「やってなかったですね」  
ジ「かっこよさげな先生なの？なんかちょっとスマートな」

女「そうですね…モテてはなかったけど、結構…誰に似てるって言われたっけな、なんか優しい感じのもこみち（笑）」

ジ「イケメンじゃん」

女「でもそんなモテてないよ。なんかナメられててみんなに。若いから。逆になんか…うちの副担だったんですよね、うちの副担で、担任がワイルド系の先生で、みんなそっちに惹かれてて（笑）。だから、みんななんか好きっぽくて。いやほんと副担なんかより担任の先生のほうがいってみんな言ってる、だから担任の先生が部活の大会とかで休んだ日とかは副担が来るんですけど、なんかみんな話も聞かないし、メッチャひどくて先生可哀想だなんて思ってる。で、ずっと…」

ジ「そこで、ちょっとかわいく見えたりするの？」

女「いや（笑）」

ジ「ないんや？」

女「かわいくは見えませんが、可哀想だなと思って見てたけど」

ジ「へえー。先生怖いなあ」

女「（笑）ほんとに」

ジ「できないわ」

女「まあうちの生徒…うちのクラスがひどかっただけなんですけど（笑）本当に」

ジ「あと不良クラスだった？」

女「まあまあ、そんな感じですね。不良まではいかないけど結構なガキの集まりで（笑）」

ジ「ちょっとアレや、ちょっと離れて冷めてるタイプや。いつも（笑）」

女「いやほんとに」

ジ「これ、現実主義者なんやな？」

女「いやまあ…ほとんどだって、うちのクラスの男子とか、基本ホストですよ。やってたの」

ジ「ん？」

女「ホストやってたんですよ、みんな。なんか卒業してから（笑）えっ？とか思って。なんでみんなそっちの道に行くの？みたいな」

ジ「へえ、女の子も夜入るの？」

女「夜やってる子もちょいちょいいますね。今もやってる子もいますし。元やってたという子も。けっこうだからそっち系が多かったんですよ。てゆーか分かんね（笑）」

ジ「ヤンキー校だ。ちょっとした」

女「なんかもう反抗ですよ。みんな反抗するみたいな」

ジ「そのクラスだけ？」

女「いや、なんか学校がそんな感じなんで」

ジ「ほー」

女「結構バカの集まりで、やりたい放題自由すぎてほんとに。テストとかメッチャ簡単だし（笑）もうマジ、テスト対策の時、先生が答え全部教えるみたいな高校（笑）」

ジ「なにそれ？」

女「（笑）」

ジ「テストじゃないね（笑）もうだれも赤点取らないようにするために、本当に答えまで教えてまでこれはこうすればもういいからみたいなの、これをこのまま暗記しろみたいなの。記号の問題とかも、その記号だからみたいなの感じで（笑）」

ジ「あ、記号も何、暗記させられんの？AとかBとか、あそういう話ね。ここは出るとかって教えるとかじゃなくて記号を教えるの（笑）やばいじゃん、それ」

女「もう本当に。このままだからとか言って（笑）」

ジ「すごいね」

女「どんだけ先生も必死。そこまでして赤点取ってほしくないのみたいなの。でもそれでも取るやつ結構いるから、ほんとバカなん（笑）」

ジ「それ、そこまでの聞いたことないなあさすがに」

女「ほんとに馬鹿なんですよね。あれはやばかった」

ジ「なに、その先生はそういう先生だったわけ？」

女「いや、だから結構そういう先生が多くて甘いついていう・・・厳しい先生はほんと厳しいんですけど、まあナメられてる先生はナメられてたから本当にひどかったですね」

ジ「それはひどいなあ」

女「ひどい学校ですよ」

ジ「記号教えるはやばくない（笑）」

女「本当に」

ジ「やばいなあ」

女「それで赤点とるはやばいっしょみたいなの（笑）ずっと寝てたりするんでテスト中。男子とかよくいたけど」

ジ「早く終わらしちゃってとか？」

女「いや、何もやらないの。名前だけ書いて出すみたいなの。ほんとにアホでやばいの」

ジ「そんなにやばいのは見たことないな学校で」

女「本当にやばい。勉強できる子たちも、まあいたんですけど、その子たちはその子たちでアニヲタだし（笑）よくいる眼鏡かけてなんかすごい・・・もう同好会みたいなのあって」

ジ「アニメ同好会みたいなのやつ？」

女「いやもうほんとに。放課後みんなが集まってなんかやってんの」

ジ「部活みたいなの作ってるの？何人かで」

女「そうなんですよね。いや、いらなっとか思った（笑）。でも友達もいたから、それはちょっと言えなかったけど（笑）。何がいいんだろうなと思って」

ジ「へえーすごいなあ最近は」

女「ほんとにやりたい放題、あんな学校はもうないと思う、ほんとに」

ジ「なかなかフリーだったんだ部活とか、でもあったん？」

女「いや、ありましたね、一応。一応あったけど、多分そんな…」

ジ「ないの？なんか活躍してる部活とかないんだ？」

女「ないです…何が？野球は弱いしサッカーもそんなないし、女バスとかですかね。多分あそこら辺が一番活躍してた気がする」

ジ「女子のほうがパワーがあるような」

女「そうなんですかね」

ジ「ふーん。なんかやってた？」

女「何にも（笑）何もやってない帰宅部です」

ジ「帰宅部？遊んでた？」

女「高校はちょっと遊びたいなと思ってとりあえず。でもなんか東区だったんで提起が札駅と大通り通ってたんで、なんかもう1年の頃に毎日のように来てて、もう遊び飽きちゃって、ほんとに今となってはもう（笑）」

ジ「2年からどうしようみたいな」

女「本当に遊びすぎたね（笑）もうないよね遊ぶとことかなんて」

ジ「高校なああ…何やってたかな。メッチャ真面目でやったけどな」

女「（笑）」

ジ「バスケットやってて、結構強かった、まあレギュラーじゃなかったんやけど」

女「（笑）」

ジ「じゃなくても厳しいから。最初20~30人入ってきてても残るのは何人かしかいないんだよね。それだけ厳しくて。そればかりだな。女っ気ゼロ（笑）」

女「（笑）部活は…まあ」

ジ「そっか、まあないんや。かっこいい先輩みたく部活もまあまあやから」

女「もうないですね。ないです。それも」

ジ「なんやー」

女「ほんとと思わなくて、なんかスポーツしてるときにみんな体育の授業とかで男子の見てかっこいいとか言うけど、基本、毎日見てるアレでしょみたいな（笑）いやほんとに、基本アレでしょ、みたいな。あのいつもバカやってるアイツでしょって（笑）」

ジ「あんま流されないな。そういうところには」

女「いや本当にダメなんですよね。そうなれなくて（笑）そういう夢みるってことができないんですよ」

ジ「ああー。結構しっかりした男の人が好きなんじゃない？」

女「そうですね。結構…」

ジ「考え方とかしっかりしてる人が」

女「そうですね。だから年上好きだからやっぱり先生とか好きになるんだろうなとか思って（笑）どうせ。本当に」

ジ「20代前半の先生とかいいのか。20代だったら、そんなにしっかりしたのも少なそうだけ

どな」

女「でも普通に30代の先生とか普通に好きでしたから。36歳とか（笑）」

ジ「中学校とか」

女「そうですね。なんかもう本当に。その年に見えなくて、まず」

ジ「ふーん」

女「でも普通にしっかりしてる先生だったから」

ジ「おじさんにはモテそうやし」

女「（笑）いやでもおじさんにモテた事はないです」

ジ「あんま出会いがないん？ここにもたまにナンパおじさんがいるって聞いたけど？」

女「本当ですか？分かんない、なんか。たまに…いやでもうち…はないですね。すすきのに行っても酔っぱらってるんだぐらいにしか見えないから」

ジ「あ、酔っ払いによく声かけられるんだ？」

女「よくなんか…でも、結構20代くらいの人もかけてきますけどね。『これからカラオケ行く？』とか『飲みに行く』とか言われて『いや、いいです』って断って（笑）友だちといる時とか、普通にいや、いいですつって」

ジ「行ったことないの？」

女「ないですね。いや基本かっこよくないし（笑）。かっこよくないし意味ない。なんか酔ってそうだし怖いしいやみたいな」

ジ「どうだろうね酔った勢いで声かけられるのもなんか、適当に声かけられてるような（笑）」

女「本当に、いやいいですう（笑）」

ジ「まあねー」

女「だから、すすきのの夜に話しかけられるのは全部酔ってる人だとしか思えないから、絶対付いていかないですよ（笑）なんか1回外人にもからまれて」

ジ「あ、外人いる？」

女「3回ぐらい。韓国人と…」

ジ「韓国人なんだ」

女「なんかあとアメリカ人かな？白人の人。夜に、なんかほんと夜10時、11時ぐらいにいきなり『カフェ行こ』とか言って、いやこんな時間にカフェなんてねーよとか思って（笑）すすきのだしここしかも、みたい（笑）」

ジ「場所分かんねえよな、多分」

女「いや、いいですつって」

ジ「韓国人か」

女「韓国人もなんやろ、すすきののなんか祭りときかな。なんかいきなり絡んできて」

ジ「友だちと一緒にいたの？」

女「そうなんですよ。したっけ急に絡んできて、なんかこれから何すんのかなみたいな感じで言

われて、いや知らねーとか思って。いや、いいですいいですつってもう（笑）ほんと、逃げましたけど」

ジ「イケメンでもなかった？」

女「全然。まあなんか韓国人っぽい顔でしたよ。よくある」

ジ「アメリカ人も微妙だった？」

女「なんかオジサンでしたねそれは（笑）」

ジ「おじさん？」

女「結構おじさんでした。うちら消えた瞬間、違う女の人たちに話しかけてたからもう…（笑）ああ、これはいいやみたいなの。さすが白人とかそっち系はそうなのかなあとか思っ  
て」

ジ「あー白人はそうだよなあ」

女「結構いろんな女の人に話しかけたりしそうだから（笑）」

ジ「白人はもう、押す、押す、押すだからな。」

女「そんな白人好きでもないし、みたいなの」

ジ「アメリカ人の友だちとかもひたすら口説くだけみたいなの感じ。日本人とそこちゃうんや  
ろうな」

女「あー。あんまりちょっと分かんないです」

ジ「外人はぜんぜん好きじゃないんや？」

女「そうですね、一時期好きっていうか、なんかハーフの子どもが欲しかった時期がありま  
したけど（笑）かわいくて」

ジ「かわいいよなあ」

女「外人と結婚したいと思ったけど、もう別に今は（笑）…どうせ英語できないし。どうせ  
英語できないから」

ジ「英語覚えればいいんじゃないの？」

女「英語、もうほんと嫌いで（笑）、学校時代から英語は…」

ジ「苦手なん？」

女「本当に。数学と同じぐらい嫌い（笑）」

ジ「得意なのなんなの？」

女「生物系は得意でしたよ。90点で普通でしたからそれだけは」

ジ「生物選考してなかったから、よく分からん。遺伝子がどうのこうのとか」

女「ああ。物理はダメですね」

ジ「そういう計算系苦手なんや」

女「そうなんです」

ジ「おれ史学取ってたからな」

女「ああー」

ジ「地震がどうのこうのみたいな。マグニチュード2の計算方法とか（笑）」

女「そこら辺はなかったですね、ほんとあんまり」  
ジ「高校生な…戻りたいけどな」  
女「まあ確かに、自由でしたね」  
ジ「今のまま戻ってみたい」  
女「(笑) めっちゃ自由だったなあ…今思えば」  
ジ「ちょっとギャルとか多い？」  
女「まあそうですね。基本なんか。化粧とか結構ケバい人と多かったです。学校出てホームとか地下のトイレで化粧メッチャして、街行くみたいな」  
ジ「へえ-。狸小路？」  
女「そうですね。結構」  
ジ「狸小路に結構人集まってない？ゲーセン前とかに」  
女「そうなんですよ」  
ジ「あそこに集まる感じ？」  
女「うちの代が一番ひどかったんですけど、今そうでもない気がする。うちらがもうひどすぎて」  
ジ「毎日はしゃいどったん？」  
女「ほんとに。意味もなく街にいるみたいな(笑)」  
ジ「ああ、高校生ってなぜかいるよな」  
女「いやーそうなんですよね。なんか用事もないのに、ただいるみたいな。結構ありましたよ」  
ジ「狸小路にいたん？1年生のとき」  
女「狸小路…まあそうですね。狸小路と札駅見て、でそのまま大通り来て狸小路行ってカラオケ行ったりして遊んでました」  
ジ「AAA歌ってな」  
女「(笑) うん…AAA…」  
ジ「高校生のカラオケ率、半端ないもんな」  
女「いやーそうなんですよね。遊ぶと言ったらカラオケみたいな」  
ジ「あとあのクレープ？」  
女「(笑) ああ、クレープ」  
ジ「(笑) マリオンクレープやけど」  
女「ありますね。たまに食べる」  
ジ「カラオケ行ぐらいかな」  
女「そうですね。基本、あと何もない。ただどこかでたむろってって話してるだけとか」  
ジ「そんなお金もないしな」  
女「そうなんですよね。みんなバイトもしてないし、そんなに(笑)」  
ジ「あ、でも飲みに行ったりとかしないんか？」

女「そうですね」

ジ「人減ったないきなり」

女「うーん、誰もいなくなったね（笑）」

ジ「今日は土曜日だよ」

女「土曜ですよ」

ジ「すすきのは混んでるかな」

女「そうですね多分。晴れてるし、今日は」

ジ「結構飲むの遅いんだ？」

女「（笑）」

ジ「お酒とかもピッチ遅い人？」

女「いや、そうですね」

ジ「あんま水分取れない人や」

女「一気に飲むってことができない」

ジ「別にいいよ、せかしてないから（笑） ごめんごめん。あんまお菓子屋さん巡ったりはしないのね？」

女「あんま食べれないんですよ。甘い物っていうか、そういうケーキ系（笑）」

ジ「ご飯は？」

女「ご飯は食べれるけど・・・」

ジ「甘いものあんま食べれないんだ」

女「そうなんですよね。なんか頭痛くなって」

ジ「どういう事？作るのに（笑）」

女「いや、作れるんですけど、作るのは好きだけど食べるのはあんまり得意じゃなくてケーキ系は。いや、1ピースもいらなかな、みたいな（笑）」

ジ「（笑） そんなレベルか」

女「いや、本当に。最近食べれないケーキと油もの、とんかつとかそこらへん、あんま食べれない（笑）」

ジ「胃腸が弱ってるんじゃないか。内臓がおぼちゃんのなんかな」

女「なんか本当頭痛くなるんですよ。なんか分かんないけど。謎のどういうことなのか分かんないんですけど」

ジ「アイスとかも食べへんのやろ」

女「アイスは好きです」

ジ「また別か（笑） 難しいな」

女「ケーキはダメです。ほかは食べれます」

ジ「ほー。生クリームがダメなの？」

女「いや、生クリームが好きなんですけどね。何がダメなのかわけ分からない」

ジ「チョコは？」



女「チョコも好きです。食べるし」

ジ「頭痛くならん？」

女「頭痛くならんし」

ジ「ケーキ食うと頭痛くなるの？」

女「ケーキになったらなんか・・・（笑）」

ジ「普段見てるからじゃない？それっぽいの」

女「そうなんですかね（笑） なんてか分かんない」

ジ「うーん、難しいですなあ。パフェとかもダメなの？」

女「あー微妙でちっちゃいのならまだ・・・」

ジ「ああ、あんま好んで食べへん。頭痛くなるから」

女「そうですね（笑）」

ジ「そういう体やねん（笑）」

女「いや、分かんない（笑） もう好き嫌いが多くて本当に」

ジ「あ、偏食なの？」

女「いやほんとに。野菜と果物しか食べれないんですよ、基本」

ジ「まあいんじゃない（笑）」

女「（笑）」

ジ「肉しか食わへんよりはいいんじゃない？健康的で」

女「いやまあね、肉もあんま脂っこいのは食べれなくて」

ジ「いいんじゃない（笑） それなら」

女「で、魚が嫌いで」

ジ「あ、そうなん？お寿司もダメだ」

女「本当に嫌いなんですよね。生ものが食べれなくて」

ジ「無理なんだ、生もの」

女「そうなんですよ。みんなにえっ？て言われるけど、『寿司とかおいしいじゃん』とか言うけど、そんなおいしいと思ったことないし・・・」

ジ「みんなさあ、行くととなると寿司とか焼肉とかって行きたがるんだよね。両方無理じゃん（笑）」

女「でも焼肉ならかろうじてまだそんな・・・いっぱい食べなきゃっていう話だから食べれますけど。いやーちょっと」

ジ「なんて言われたら嬉しいの？誘われるならスープカレーとかは？」

女「うーん微妙ですね。それなら普通のカレーのほうが好き（笑）」

ジ「難しいなあ」

女「そうなんですよね、なんだろうな」

ジ「何がある？イタリアンとかも結構脂っこいやろ？」

女「あ、でもイタリアンは・・・韓国料理好きです（笑）辛いのが好きなんですよ」

ジ「おおー…意外なとこきたな。韓国料理もでも肉系多くない？」

女「あとお好み焼きとたこ焼きは」

ジ「好きなん？タコキング行ったことある？」

女「いや、ないですね」

ジ「うまいよ、あそこ。おれなんかナメてたよ。見たこと…知ってる？タコキングって？」

女「いや、なんか聞いたことがあります」

ジ「看板がなんかボロいねん。これ絶対まずいやろって勝手に決めつけてたんだけど、この前初めて行ったらうまかった。おれ、銀だこはあんま好きじゃないんだよね。油っこくない？美味しいんだけど、あんま油っこすぎて、それだったらもうちょっと油…なんか揚げてんじゃん。揚げてないほうが好きなんだよね。まあ、あれはあれでおいしいんだけどね。なんかあんまたくさん食べれないんだよね。タコキング意外に美味しかったよ。とろとろ系」

女「おいしいですよ。たこ焼きとお好み焼きと韓国料理ぐらいですね。嬉しいのは」

ジ「韓国料理は札幌で食いにいったことないなあ」

女「ほんとに-。なんか時々行きますね。時々行きます」

ジ「どこがうまいの？」

女「やなんか、うちの通路、テレビ塔行く地下（笑）」

ジ「札幌行く地下？」

女「テレビ塔の…こっちの、ここの」

ジ「オールタウンじゃなくて…オーロラタウンだ」

女「そう、そっちです。そっちにあるライオンって店の隣にあるんですよ。その隣にあつてよくビビンバおいしくて一緒に行きますね」

ジ「ビビンバかビビンバうまいなあ。チヂミとかも好きだったよね」

女「そうですね基本なんでも好きですよ。韓国料理なら（笑）」

ジ「大久保にいたときは結構食べたけどな。大久保って分かる？韓国の韓国料理屋がいっぱいあるんだよね。あそこで好きなところがあつて、たまに結構行つてた」

女「一時期ほんつと行つた、韓国ハマつてた時期あつたんで」

ジ「韓流ビクバンみたいなアーティストとかも来て…」

女「そうですね。それで行きたいと思つてたけど、結果行かないで、もう冷めるつていう（笑）」

ジ「ちょっと腰が重いんやな。行こう思つたら安くない？韓国」

女「まあそうですね」

ジ「なんか見たらピーチつて航空やつたら往復で3,800円とかでいけるんだよ。メツチャ安いなと思つてびっくりしたわ。韓国近すぎ」

女「韓国つて1回行きたいんですよ」

ジ「おれも行つたことないよ、韓国は」

女「ねえ、食べてみたい韓国料理を本場の（笑）」

ジ「うまいかなあ、キムチ辛いっていうよね」

女「あーそうですね。どんだけ辛いんだろ。辛いんだけど食べちゃうんですよね（笑）」

ジ「結構平気なんだ？あの辛さは」

女「そうですね、全然。普通に食べれます。日本のは（笑）日本で食べるやつは全然食べれる」

ジ「どうなんやろ。おれ食べたことないから。海外行くなってなって韓国行くなってならないんだよね。近すぎてき（笑）他んどこ行っちゃうんだよね。せっかく行くなら」

女「それならハワイとかそっちとか」

ジ「他んどこ行っちゃうからさ」

女「なんかないですね」

ジ「お好み焼きはどこがうまいん？」

女「どこがええか・・・」

ジ「マッカって分かる？なんか結構有名だし、すすきのにあるんだけどそこはまあおいしかった」

女「うち風月しか行かないんで（笑）、お好み焼きは、基本は」

ジ「ムーの子孫はあんまりうまくなかった」

女「あ、そうなんですか？」

ジ「行ったことあるん？」

女「行ったことないんですよ」

ジ「あんまやったな。店員さん全然来てくれないし」

女「（笑）なんかそれは聞く。店員がなんかダメみたいなのがあるのは聞いたことがあります」

ジ「接客ができないんだ（笑）」

女「行ったことはないですよ」

ジ「札幌で多分一番やる気ないね（笑）あれはやる気ないなあ」

女「よくあれですよ。学生がみんなで卒業式終わったあととか、よくみんなで行くってなっているんですけど、うちらはなんなかったなあ、あそこは。みんなクラスで集まる時とか、よくあそこ、結構人気なんですけどね」

ジ「高校生とか多いね」

女「そうですね」

ジ「なんか学割みたいなのがあるでしょ？お好み焼きは札幌来てからはそんなに・・・マッカは有名らしいね。おいしかった。あとタコキングも、これメツチャうまかった」

女「ああータコキング」

ジ「夜しかやってないのかなあ。今度行こうよ、じゃあ。たこ焼き。タコキングうまいぜ」

女「（笑）」

ジ「おれめっちゃ好きやねん。おれ、粉もん超好きやから、自分でも作るんだよね。お好み焼」

女「ああ」

ジ「だから、結構うるさいんやけど、あそこうまかった。意外にうまかった。今、旅行とかもあんまり行かんよ。関西も結構行けるんじゃない？」

女「あんま行かないですね。最後に行ったのって高校のアレですね。修学旅行。大阪だったんですけど」

ジ「大阪行ったん？」

女「奈良とか大阪らへんと沖縄」

ジ「沖縄？すごいね（笑）」

女「（笑）だったんですよ」

ジ「私立？」

女「私立です」

ジ「私立じゃないと沖縄まで行かんやからね」

女「そうですね」

ジ「なんか選べるタイプだよ」

女「いや、なんか普通にみんな同じですね。で、なんかグループっていうかなんか1組から3組はルートが違うんですけど、行く日とかそれに…だからアレだったんですけど、基本、先生たちが決められたところだったんで」

ジ「自由行動ないの？」

女「自由行動は1回、大阪は1回自主見あって、沖縄も1回夕方ぐらいにありまして、大阪の街とUSJは自由でした」

ジ「え、何泊？4泊とかいくの？」

女「そうですね。それぐらい」

ジ「じゃないと、見れないよね。移動だらけで」

女「（笑）まあ楽しかったんですけど、1回大阪で喧嘩したんですけど、班で（笑）」

ジ「何が…なんで？」

女「いやーなんか、5人ぐらいいて、2人後ろでメッチャ遅いんですよ。歩くのが。なんなのマジでみたいな」

ジ「それで？（笑）」

女「なんなのみたいな。そして『なしたの？』みたいな感じで聞いたら、後ろの1人が具合悪いんだってみたいな感じで言ってる、『いや、じゃあ早く言って』みたいな感じで言い争い始めて。ちょっとどうしたらいいか分かんなくて、とりあえず泣き始めて、もうどうしようみたいな感じで…」

ジ「他の人が喧嘩してたんだな」

女「いや、ほんとに。みんなイライラし始めて、いやもうなんで大阪に来てこうなるの？みたいな。本当にやだマジで帰りたいってマジでギャン泣きした」

ジ「へえーそれは嫌やなあ」

女「いやほんとに。大阪の空気に慣れなかったらしくて、しかも道頓堀って結構どこ行ってもタバコ臭くって」

ジ「ああ、あっち臭いねー」

女「そうなんです。それで多分具合悪くなったりしたんじゃないかみたいなの。● (01:23:03) はあったかもしれないですけど、そこまでそんな大喧嘩するほどのことじゃないじゃんみたいなの (笑) 」

ジ「まったくもって当然でございます」

女「いや、本当に」

ジ「すごいなマジ喧嘩か (笑) 」

女「本当にメッチャイライラみなしてたから、なんでここに来てこうなの？みたいなの。普段全然仲いいのにいきなり…」

ジ「なんだろうね？」

女「ビックリして」

ジ「大阪の空気にやられたよな (笑) 」

女「でもなんかその時にカメラマンさんが来て、『写真撮るよー』ってなって撮ったんですけど、さっきカメラマンさんが結構チャラチャラしたお兄さんたちが大阪の、いて、その人とぶつかったんですよね。メッチャ舌打ちされててカメラマン (笑) えーとか思って、前見ろよみたいなの感じでメッチャ言われてて、でもカメラマンさん気付いてなくて (笑) 」

ジ「 (笑) 」

女「でも通り過ぎていったから大事にならなくてよかったーとか思って。うちらはもう目の前でそれ見てたから、えっ？とか思ってたけどほんとに」

ジ「カメラマンさん鈍感やな」

女「普通に『はい、いくよー』とか言って撮ってるから、ああーみたいなの感じで。大阪いいけど、確かに空気は悪かったですね。でもその今具合悪いツテでこ今道頓堀にいるっぽいですからね (笑) 」

ジ「なんでやねん。働いてるの？」

女「なんかそっちに研修的なやつがあって、今…2日ぐらいから大阪に行ってるらしくて、それで道頓堀大丈夫なのかなと思って。1人だけ」

ジ「具合悪くならないように (笑) 」

女「 (笑) 1人はちょっとヤバイです」

ジ「まあケンカする事はないからいいやな (笑) 。せめて具合悪いで終わるからな」

女「ほんとびっくりした。あのケンカは」

ジ「それは嫌やな。喧嘩するの嫌やもんな。一日無駄になる」

女「それしかほんと頭になくて、大阪の研修は全く面白くなかったな。ケンカして終わりみたいなの (笑) 」

ジ「沖縄楽しかった？」

女「沖縄は楽しかったですね。そんな喧嘩もなかったし（笑）、結構お土産見たりして…」

ジ「国際通り？」

女「そうですね。それも行って、いろいろ見たりして楽しかったこと覚えています。でも暑くて」

ジ「暑く…何月に行ったの？」

女「でも秋ぐらいでしたよ」

ジ「ああ、10月ぐらいまで暑いよね」

女「そうですね。本当に暑くて、もう夜寝れなくて、しかもみんなの部屋で冷房つけてるヤバいことになるから、なんか付けるなって言われて」

ジ「どういうこと（笑）」

女「冷房つけちゃダメみたいな感じで（笑）」

ジ「どういうこと（笑）1普通に大丈夫じゃない？どう見ても」

女「いや本当に。みんな全員つけたらブレーカー落ちんじゃね？みたいななんかよく分からないことを先生が言ってて、だからなんかつけちゃダメって言われてて…」

ジ「どう見ても落ちないように設定されていると思いますけど（笑）」

女「いやほんとに。メッチャ暑くてほんと寝れなかったです。2時間睡眠ぐらいしかしてないと思う。みんなで騒いでた。ほんとに。でもなんか、3人ぐらいは寝てたな部屋の…6人ぐらい、7人ぐらいの部屋で3人寝てるんですけど、他の…うちとか暑くて寝れないからとりあえずYouTube見まくって（笑）」

ジ「まあスマートフォン世代だもんな」

女「とりあえずひどかった感じで」

ジ「へえ、冷房つけないって意味分からないな」

女「でも二日間だったんですけど、次の日に泊まったホテルは全然冷房使ってよくて（笑）」

ジ「あ、メッチャボロかったのかなあ？」

女「そうなんですかねえ。でも結構…それについてよかったね。その時は普通にその前の日寝てないから全然、普通に寝れましたよ。しかも3人部屋とかだったんで、全然静かに寝れた（笑）」

ジ「いいな修学旅行」

女「楽しかった」

ジ「昔過ぎて忘れちゃった」

女「（笑）でも、その所々しか…奈良はつまらなかった。京都も行ったんですけど、お寺巡りだったんで全く興味なかったから…」

ジ「いやーおれもそうやったな。おれも修学旅行、京都と大阪やったんやけど、まったく過去…今やったらまだ面白いかもしれないけど、全然興味なかったもんなあ」

女「本当に。とりあえず何言ってんだろみたいな。とりあえずしゃべってとりあえず雰囲気

気だけ写真に撮って」

ジ「そうそうそう。なんか寺光ってるなあと思って（笑）」

女「本当に。全然。へーみたいな」

ジ「そうだよ、高校生ぐらいじゃ」

女「本当に」

ジ「おれもそうやったな」

女「それぐらいでしたね。適当に流してたなあそこは」

ジ「おれ、ご飯だけが楽しみだった」

女「うち、京都のご飯が食べれなくて、また（笑）」

ジ「なにある？」

女「なんか湯豆腐出たんですよ。うち豆腐食べれなくて」

ジ「ダメじゃん（笑）」

女「（笑）そしておかずとかも結構和食じゃないですか。だから和食食べれないんです」

ジ「ダメじゃん（笑）」

女「いや、本当に食べれるもんなくて、仕方ないから炊き込みご飯的なものしか食べてなかった（笑）」

ジ「メチャ野菜やん。でも野菜系じゃない？煮込みがダメなの？煮込んだ感じ」

女「いやなんだろうな和食・・・魚はダメだし、」

ジ「だから、味付けは苦手なの？」

女「いやそうなんですよね。あんまりおいしくない」

ジ「結構、関西系多いんじゃない？中学で京都のほうっていったら。北海道で和食って言ったら海産物系結構出ちゃうから」

女「湯葉、湯葉出たんですけど、湯葉ってほんとまずくてどうしようかと思って（笑）」

ジ「（笑）こんなもん出すんじゃねーよって」

女「ほんとヤバかった」

ジ「まあ、修学旅行韓国だったらよかったなけどな」

女「それなら全然良かった。でも、全然そんな・・・沖縄は嬉しかったですけど」

ジ「沖縄料理食べれた？」

女「食べましたね」

ジ「意外だね（笑）それは意外だね」

女「それは食べれたんですよ」

ジ「沖縄に泊ったら何が出るの？旅館とかで」

女「いやなんか・・・プレル？プレル食べてない気がする」

ジ「地元の料理？」

女「多分そうですね。あとなんか普通に・・・夜ご飯とか自主見だったので自分たちのどこかで食べれみたいな感じで・・・チジミ食べました（笑）」

ジ「チヂミ？チジミある？」

女「（笑）分かんない。なんか食べましたね。チヂミ食べた。あとなんか・・・サラダとかなんか、よく分かんない。なんか沖縄関係なかった気がする（笑）」

ジ「全く関係ないところ行っちゃったんだ」

女「（笑）まったく関係なかったです」

ジ「沖縄そばとかそういうのじゃないんだ」

女「それはなんか1回出ましたけどね。みんなで食べるのに」

ジ「タコライスみたいなの、それは食べれたの？」

女「ソーキそば出た気がする」

ジ「そばは食べたんだ？」

女「全然おいしかったですね。でも普通のそば食べれないんですけど」

ジ「好みがよく分からんな」

女「（笑）いやー、本当に。変わってるんで」

ジ「ああ、沖縄じゃ、住めるね」

女「そうですね。でも、暑いからあんまりアレだけど」

ジ「でも普通でも、冷房つけるからね」

女「まあでも、普通に・・・あ、水族館も行きました」

ジ「あ、美ら海ね」

女「あれはすごいキレイだった」

ジ「美ら海キレイだよ。あのガラスのでっかいジンベイザメの」

女「そうです、そうですね。すごい大きかった。あれは楽しかった」

ジ「なんかサメの博物館みたいのがあるよ」

女「ああ、なんかあった気がします」

ジ「美ら海ね。周りもキレイだよ、なんかね。海辺行った？」

女「行きました。すごいキレイ」

ジ「あの辺はいいなあ」

女「なんかマリンスポーツ的なのがあって・・・」

ジ「やったん？バナナボート？」

女「なんか体験みたいなやつで。そうですそうです。あれ、楽しかったですよ」

ジ「じゃあ海辺のホテルに泊まったの？」

女「ホテルは全然・・・多分関係ないホテル。普通のなんか・・・なんてホテルか忘れたんですけど・・・」

ジ「那覇に泊まったのかな？」

女「たぶんそうですね。そうです」

ジ「へえー。全部そこ？沖縄に2泊いたの？全部そこ？」

女「どこだっけ2泊でした。最初のところが、そこの冷房ダメなところで、2日目が冷房オ



ッケーだったので」

ジ「それしか覚えてないんだ？（笑）」

女「そうですね。どこだったっけな」

ジ「難しいもんなんだなあ」

女「いや、そうなんです」

ジ「修学旅行懐かしいなあ。なんかふざけて京都で…なんか池みたいなどこあるよね」

女「ああ」

ジ「そこに友だち落としちゃったのは覚えてる（笑）」

女「え？（笑）」

ジ「ちょっと脅かしてやろうかなあと思って『ほっ』ってやったら、そのままなんか驚きすぎて（笑）、なんかチェーンみたいなのあったんやけどそこ飛び越えて落ち合った（笑）。めっちゃ先生に怒られた覚えはある」

女「それはやばい（笑）」

ジ「ほんまごめんねってメッチャ謝ったわ」

女「（笑）」

ジ「学生服とかで行くやんか。制服びしょびしょにしちゃったから。メッチャ怒られたなーほんまごめんて。覚えてるわー。それが一番の思い出だったかもしれない」

女「いや確かに、それは忘れられないですよ（笑）」

ジ「懐かしい…行くか、そろそろ」

女「そうですね」

ジ「あ、連絡先教えてよ」

女「あ、はい。LINEでいいですか？」

ジ「うん、LINEでいいよ。IDとかどうしようか」

女「ID検索します？」

ジ「短い？」

女「短いですよ」

ジ「ああ、じゃあ言って」

女「普通に小文字で〇〇〇多分これで出ると思うけど」

※LINEのIDを口頭で女の子が言っているために伏せ字とP音

ジ「ああ出た、目が大きいのが出た」

女「（笑）」

ジ「プリクラ出た。プリクラ…佐藤勝利って誰？」

女「SexyZoneですよ」

ジ「あ、SexyZoneも好きなの？」

女「好きですね」

ジ「佐藤勝利って…メインじゃないよね」

女「や、あの…真ん中のへん（笑）」

ジ「あ、あのイケメンか？」

女「そうですね。まあ一個下なんですけどね。」

ジ「そこ大事なんやな（笑）」

女「でもまあ、芸能人を別だ」

ジ「届いた？」

女「はい。そうですね、なんか送ってきた…スタンプが…」

ジ「スタンプ送った」

女「ああ、来ました」

ジ「なんかトップ画の写真、ちょっと前のやからチャラいんやけど」

女「いやいや（笑）」

ジ「髪の毛が長い。黒染めしてもすぐ茶色くなるんだよね」

女「あー」

ジ「うーん、ダメだもう。かわいい系が好きなの？顔は」

女「なんかどうなんですかね（笑）」

ジ「佐藤勝利って…18歳やで」

女「そうですね」

ジ「ダメだわ（笑）」

女「（笑）」

ジ「18歳には勝てない…肌のハリが」

女「いやいやいや、全然そんな」

ジ「まあでもこんなイケメンいないよな（笑）」

女「そんなー（笑）」

ジ「高校の時いなかった？」

女「全然、そんな人はいないですよ、さすがに」

ジ「1人ぐらいいた？メッチャアイドルみたいな、かっこいいの」

女「あんまいなかった気がするんですよ」

ジ「うちの学校1人ぐらいやったかなあ…」

女「1人いたんですね？」

ジ「1人いた。男の子ね。女の子も1人いたなあ。このグラス割り…落っちそうでなんか危ないんだよね」

女「音がしかも…（笑）」

ジ「（笑）行こうか。靴かわいいな。何これ？」

女「去年、一昨年かな、ぐらいに…」

ジ「でもキレイじゃね。傷ついてないもん」

女「いや、あんまり履いてないから」

ジ「なんか花付いてる」

女「いつも楽な、ヒールないやつとかしか履かないよ」

ジ「それもでもそんな、高くない？5センチくらい？・・・東西線だからこっちかな。優しいから見送ったるわ（笑）恩着せがましい（笑）」

女「いやいや（笑）」

ジ「休み決まってんの？平日？」

女「そうですね。4月はだいたい決まっていますね」

ジ「ああそうなんや」

女「あんまなかった。今月（笑）」

ジ「週1とか？」

女「そうですね。昼に終わるから」

ジ「でも朝終わるから・・・ま、朝早いから」

女「お昼ぐらいには終わるんで・・・後なんで」

ジ「近いうち・・・うさぎカフェやな（笑）」

女「マジで？（笑）」

ジ「うさぎカフェ行こ。うさぎカフェ行こう行こう・・・聞いてから行きたいなと思ってたけど、なんか一人で行けないやんか（笑）。男一人で行くのなんか嫌やんか、うさぎカフェ」

女「一人で行ける人って勇気がありますよね」

ジ「せやな・・・デザート系も行けない。一人で。カフェとかはいいんやけどな」

女「好きな人は行けると思うんですけど」

ジ「女の子が一人で焼肉屋へ行くみたいな感じだよな」

女「ああ、それはちょっと行けないです」

ジ「んー危険だよ。変な目で見られそうだよ（笑）。一人で焼き肉屋来てたら、多分『あの一人だよ』みたいになるよね（笑）。何言われるかみたいな。友だちいないんだなって（笑）。ありがとね、ほんま」

女「じゃあね、また」

ジ「連絡すんね。ありがとう」

<終了>